

人間力育成を取り入れた e ポートフォリオ

田中佳子 (Yoshiko TANAKA)

E-mail: ta_nakayoshi@mbh.nifty.com

1. 研究の経緯

本研究は、学生自身が在学期間を経てどのように自らが変化していくかを学生自身が見つめ、考えることを中心におき、学生への教育的配慮を e ポートフォリオを活用した省察を通して人間力を育成することを計画した。その e ポートフォリオの運用と評価を行う予定である。

2. 学習者特性の成長を測る

大学生は青年期後期の、自我同一性の確立という大きな発達課題がある。この発達課題を学生自身の人間力育成の課題と捉えた。そのために、生涯学び続ける意欲、自分がどのように学んでいるかという学習観、ライフクライシスにおいても立ち直り継続していく精神力などの学習者特性に関わる力を「学修観」としてこれを指標にして自分を振り返ることで人間力を育成することを企図した。

3. 人間力育成のために自分で自分を「学修観」

上述した、学習者特性を測るために、市川の学習動機(6 カテゴリー)・学習観(4 カテゴリー)の尺度、小塩の精神的回復力尺度(3 カテゴリー)の(計 13 カテゴリー)3 点を使用した調査を行い、3 因子を抽出した。

この結果から、因子 1 として、感情調整、失敗に対する柔軟性、思考過程の重視、方略思考、意味理解思考、因子 2 として、新奇性追求、肯定的未来志向、充実志向、訓練志向、実用志向、因子 3 として、関係志向、自尊志向、報酬志向である。これらを順に、「考えようとする力」「行動しようとする力」「繋がろうとする力」と名づけた。

4. 学習者特性「学修観」の可視化

個々の学生の情報を一元化したものとして、個票(図 1)を作成した。個票には、教科の得点と、3つの力を、平均より上(H)か下(L)を表示し、そのタイプに応じたアドバイスを表示している。

5. 個票の e ポートフォリオシステム化

学生の学習者特性結果が e ポートフォリオシステムで可視化されることで、即時性を持ち、ライフイベントに応じて、適宜学生が自分を振り返ることが可能になる。人間力育成のために、ポートフォリオにおいてフォーカスして自分を振り返り省察することができる。そこで、先行研究で構築されている千歳科学技術大学の e ラーニ

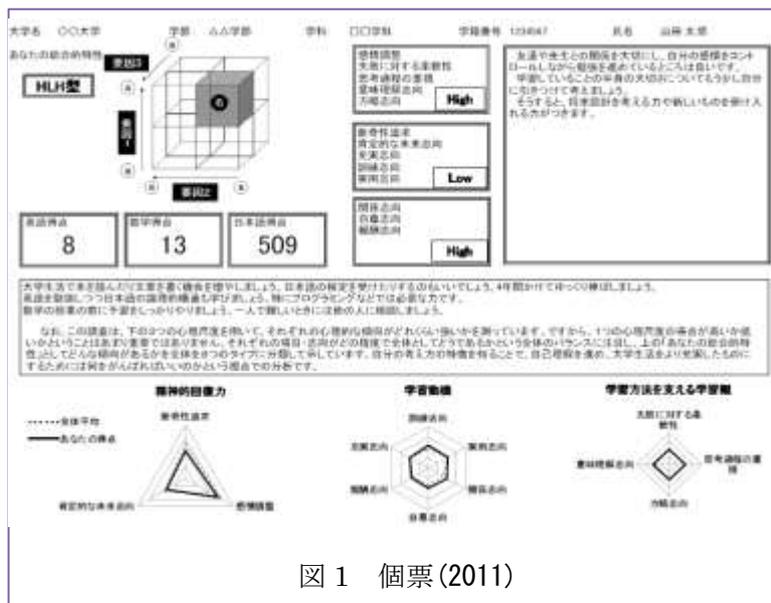


図 1 個票(2011)

ングシステムと学習カルテシステムを利用した。

e ポートフォリオには学習者特性の結果が記載された個票の情報が表示されるようにした。機能のイメージを図 2 に示す。①には、抽出した 3 因子である 3 つの力が表示される。また図中②のボタンをクリックすると、学習動機・学修観・精神的回復力がそれぞれのバランスを示すことで学生自身の変化を詳細に把握するためにレーダーチャートで表示される。③には 8 種類のアドバイジングメッセージが表示される。さらに、過去に行った診断結果や、自身の配属学科や他学科の統計結果（例として、同じような特性の学生がどのくらいいるのか）を横並びに表示できることで、確認と比較ができる工夫も行っている。

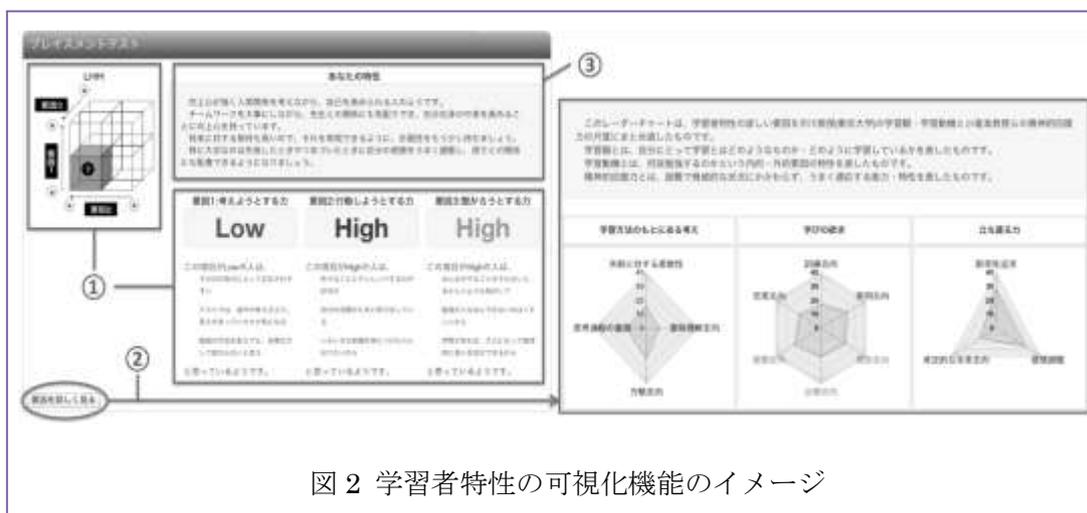


図 2 学習者特性の可視化機能のイメージ

6. 今後の課題

今後、e ポートフォリオと紙の個票との差異についてのアンケート調査を行い可視化の有用性を検討していく予定である。

参考文献

1. 土持 ゲーリー 法一, “ポートフォリオが日本の大学を変える—ティーチング/ラーニング/アカデミック・ポートフォリオの活用”, 東信堂, (2011)
2. 市川 伸一, “学習動機の構造と学習観との関連”, 日本教育心理学会第 37 回総会発表論文集, 177 (1995)
3. 小塩 真司, 中谷 素之, 金子 一史, 長峰 伸治, “ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性—精神的回復力尺度の作成—”, カウンセリング研究, Vol.35, No.1, 57-65 (2002)
4. 山川 広人, 斉藤 史徳, 立野 仁, 田中 佳子, 小松川 浩, “人間力の自己診断テストと連動した e ポートフォリオの設計”, 大学 ICT 推進協議会 2012 年度年次大会論文集, 247-253 (2012)